

# 人を育てる会社の社長が 今考えていること

vol. 3

## 休みについて

お祭りのような 10 連休が終わり、世の中はいつも通りに戻った。ラッキー賞のような、ご褒美のような 10 連休だったけれど、終わってみると「長過ぎた」と振り返る人が案外多い。新聞や報道を見ても、同じような意見が目につく。来年はここまではいかない、という声も多いようだ。10 連休しても特に何の問題もなかったのだから、来年も 10 連休を続けられればいいのに、とわたしは思うのだが、そう思わない人もいるらしい。一方で残業だ、休みが少ない、ブラック企業だ、などの叫び声は相変わらず多く、うまく休むのも難しいのだなあと思う。

自身を振り返ると、社会人デビューをした頃は、とにかく休みなく働いていた。その余波で、当時の彼女に「今年に入って何回会ったと思う？ 2 回よ、2 回！」と吐き捨てるように言われて、捨てられた。それでも、止まらず働かないと不安だった。会社員ではなく、いきなりフリーのライターをしていたから、一回でも仕事を断ったら次はないと怯えていた。若さとフットワークの良さだけが売りだったので、メ切前に、できればパターンの違う原稿を 2 本以上出す。これを自分に課して、日々怯えていた。たまの休みは、休みなのではなく「取材が入らなかった日」であり「依頼が途切れた日」だったから、さらに怯えていた。

やがて気持ちと仕事に余裕も出て、主体的に休みを取るようになった。そして今は、休むように働くようになった。毎日が休みのようであり、仕事のようにもある。そういう毎日が自分には合っていると、このような毎日に巡り合って知った。でも、社会人デビューをした頃は、「休むように働く」という道があることを知らなかった。休みと仕事はまじわらないものだと思っていた。

☆☆☆

わたしが授業を受け持つ立命館アジア太平洋大学は、国際大学を志向しているので日本の旗日を休校にすることはない。なので、お盆やゴールデンウィークに授業日がぶつかっても当然開講する。日本で生まれ育ったわたしなんかは、ちょっと損した気分になり、日本人の大学生は大きく損した気分になる。一方で、海外から学びに来ている留学生たちは、逆に日本的事情で授業がなくなったりすると、学ぶ機会を奪われたと言って、クレームの声を上げる。

今の日本では、75歳まで働くのが当然だそうである。そして、そのために「学び直し」の機会が必要だと、たくさんの人が言っている。わたしもそう思う。例えば留学に行ったり、大学院に通ったり、あるいは海外に移住してみたり、エベレストに登ったり。中身はなんでもいいのだが、40歳になる頃までの間に、これまで来たレールを一旦外れて、何か違ったことをする。その結果、レールがより太くなったり、複数のレールを持てたりして、それが後半の仕事に効いてくる。学び直しの効果である。

会社でそんな話をしていると、「でも、どんな学び直しをするにしても、ある程度まとまった時間がいますよね。その時間を確保するために、今の仕事を辞めたりするのは、暮らしに大きな影響も出るし、相当覚悟がいますね」という話になった。そこで「アソ休（アソブロック休暇）」を作ることになった。有給、育休、産休、アソ休、である。「アソ休」は気が済むまでいつまででも取得することができて、その間給与は払えないけれど、社会保障は担保する。そうすれば、アソ休で必要なものは「お金」だけになるので、準備も計画もやりやすいであろう、と思った。

☆☆☆

肉体労働を主とする仕事に就く人にとっては、休むとは文字通り身体を休ませることだ。でも現代社会においては、休むというのは、きっとそういうことばかりではない。一時期、デジタルデトックスという言葉が流行った。これは、スマホやパソコンから意図的に距離を置いて過ごすこと。そういえば、昨日話をした女子大学生が、「彼氏よりスマホの方が好きだ。でも時々彼氏の方が好きになることもある」と真顔で話していて、その位置づけ方がよくわからなかった。

我が家の近所に住み、うちの息子が小学校に入学した時に大変お世話になったAくんは、小学4年生の頃から通塾し、受験を勝ち抜き、名門私立中学校に通っている。学校の勉強

に遅れないように今も通塾を続け、クラブ活動も並行し、毎晩夜遅くにへとへとになって帰ってくる。そんな A さんに小学校 6 年生のとき、「今一番欲しいものは何？」と尋ねたことがあった。答えは「休み」だった。わたしは色々と考えさせられた。

現代的な「休みたい」は、「指示されたくない」という声なのかもしれない。今回の 10 連休は、神の一声ならぬ、陛下の一声で決まった。そのルールに、日本中が従った。そこに、言葉にできない居心地の悪さがあったのかもしれない。だから来年はいらなくなったのかもしれない。

☆☆☆

世は兼業ブームである。そして、これと対をなして語られるのが、労務管理、特に労働時間の管理を誰がするのか？という問題である。砕いて言うと、休みをどう確保してあげなのか？という問題だ。しかしこれもまた、そもそもそういう話ではないのかもしれないなあと思ったりもする。

文/だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な 9 つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

団遊の組織論 ; <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論 ; <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めたくなくなったときに ; <https://goo.gl/bFQdpC>